日本パーソナリティ心理学会ニューズレター　No.23

発行日　2006 年 11 月 15 日　　編集　広報委員会
発　行　日本パーソナリティ心理学会（旧・日本性格心理学会）
事務局　〒169-0075　東京都新宿区高田馬場４－４－19　㈱国際文献印刷社内
電話 03-5389-6243　FAX 03-3368-2822　URL:http://wwwsoc.nii.ac.jp/jspp

【理事長あいさつ】

若手と中堅／大家が議論沸騰する熱い交流の場を作りたい

杉山憲司（東洋大学社会学部）

このたび、引き続き、理事長に就任した杉山です。どうぞ宜しくお願いいたします。

副理事長の首藤先生をはじめ、選挙結果を反映して、有能な若手の先生方にキャビネット・メンバーとしてご参加いただきました。会員の皆様に助けていただきながら、学会の発展に向けて、微力ながら努力する所存です。

この３年間の成果には、①年３号体制と電子投稿などによる機関誌の質的量的充実、②若手研究者の旺盛な発表や優秀大会発表賞などによる大会の活性化、等を挙げることができるでしょう。しかし、心理学関連の学会は 40 以上あり、そのなかで本学会ならではの特色を発揮しながら、今後の更なる発展を考えると、多くの課題も抱えています。

例えば、パーソナリティの特色ある研究課題とは何でしょうか、心理系諸学会の中におけるパーソナリティ研究のスタンスなり役割は何でしょうか、パーソナリティ研究が社会貢献できる／貢献すべきことがらは何でしょうか。このようなことを考えると、今、緊急になすべきことは、パーソナリティ研究のプロパーが学会に再結集すること、国内外および他領域との交流を密にして、会員が多様な研究テーマに取り組む体制を背後から整えることが、私たち役員に求められていると考えています。

具体的運営方針には、既存の委員会の役割と強化として、１）広報委員会とインターネット運用委員会の役割を見直し、会員および学会外へ向けた貢献の体制整備、２）経常的研究交流委員会は、会員の個人企画との差別化、委員会ならではの役割など、パーソナリティ研究の再結集と関連学会との交流の戦略的強化、を図ろうと考えております。また、各種委員会の活動に加えて、新たな課題に対処すべく、３）海外のパーソナリティ心理学関連学会との学会間の国際連携を担当する「国際交流委員会」、４）役員選挙ならびに選挙管理方法についてご検討いただく「選挙規程委員会」、５）大会運営ならびに活性化についてご検討いただく「大会活性化委員会」、の３つの委員会を立ち上げました。

若手研究者のこれまで以上の活躍と機関誌の更なる充実を前提として、以上の５つの具体策を実現することを中心に、学会運営をしていく所存です。忌憚のないご意見やご感想を杉山（E-mail:sugiyama@toyonet.toyo.ac.jp）までお寄せ下さい。お待ちしています。

第６期役員選挙結果

選挙管理委員会委員長　安藤寿康(慶應義塾大学)

会員の直接投票による理事・監事選挙の開票作業を、2006 年８月４日（金）に国際文献印刷社内会議室において行いました。その結果、次の方々が当選されました。氏名は得票順、括弧内の数字は得票数を示しています。なお、辞退者はありませんでした。

１　理事（定数 20 名）

菅原健介(23)、渡邊芳之(22)、佐藤達哉(19)、浮谷秀一(18)、北村英哉(18)、首藤敏元(18)、松田英子(17)、菅原ますみ(16)、高比良美詠子(16)、杉山憲司(15)、外島裕(15)、中村真(15)、岡村一成(14)、山崎晴美(14)、青柳肇(13)、堀毛一也(13)、藤田主一(13)、安藤寿康(11)、川野健治(9)、向田久美子(9)、次点：柏木恵子(9)

＊得票同数者は抽選にて決定。

２　監事（2 名）

繁多進(27)、手島茂樹(12)、次点：安藤寿康(4)、黒沢香(3)

なお、理事・監事選挙の有効投票者数 105 名、無効投票者数 6 名、投票率 16%で、有効投票総数は理事選挙 514 票、監事選挙 105 票でした。

引き続き新理事による理事長・常任理事長選挙が行われ、2006 年９月７日（木）に国際文献印刷社内会議室において開票作業をしました。結果は以下のとおりです。理事長は、第一位得票者の首藤氏辞退のため、次点の杉山氏に決まりました。

３　理事長（1 名）

首藤敏元(8)(辞退)、杉山憲司(6)、次点：岡村一成(2)

４　常任理事（7 名）

菅原健介(8)、佐藤達哉(7)、渡邊芳之(7)、浮谷秀一(6)、北村英哉(5)、藤田主一(5)、川野健治(4)、次点：山崎晴美(4)

＊得票同数者は抽選にて決定。

なお、理事長・常任理事選挙の有効投票者数 19 名、無効投票者数 0 名、投票率 95%で、有効投票総数は理事長選挙 19 票、常任理事選挙 57 票でした。

第６期役員構成

役員選挙の結果を受けて、以下のように役員構成が決まりました。第６期の役員の任期は、2006 年 10 月 8 日より 2009 年大会に開催される総会日までとなります（学会連合の役員・委員長の任期は別です）。

理事長

杉山憲司（東洋大学）　日本心理学諸学会連合理事・学会連合「臨床発達心理士」認定運営機構副理事長

常任理事（五十音順）

浮谷秀一（東京富士大学）　広報・インターネット運用委員会（広報担当）

川野健治（国立精神・神経センター）　学会連合「臨床発達心理士」認定運営機構理事

北村英哉（東洋大学）　経常的研究交流委員会委員長

佐藤達哉（立命館大学）　広報・インターネット運用委員会（インターネット担当）

菅原健介（聖心女子大学）　学会連合「臨床発達心理士」認定運営機構常任理事

藤田主一（日本体育大学）　財務担当

渡邊芳之（帯広畜産大学）　機関誌編集委員会委員長

理事長推薦常任理事

首藤敏元（埼玉大学）　副理事長

担当理事（五十音順）

青柳　肇（早稲田大学）　理事・学会連合「臨床発達心理士」認定運営機構監事

松田英子（江戸川大学）　理事・学会連合「臨床発達心理士」認定運営機構資格認定委員

村井潤一郎（文京学院大学）　学会連合「臨床発達心理士」認定運営機構資格認定委員

監事(当選順)

繁多　進　（白百合女子大学）

手島　茂樹（東京福祉大学）

事務局長

加藤　司（東洋大学）

委員会委員長

荒川　歩（名古屋大学）　インターネット運用委員会委員長

文野　洋（東京都立大学）　広報委員会委員長

第 15 回大会を終えて

第 15 回大会委員長　浮谷秀一（東京富士大学）

第 15 回大会を東京富士大学で開催させていただいたことに感謝するとともに、多くの方のご参加いただき充実した２日間であったあったことを重ねて感謝いたします。

参加者の内訳ですが、予約参加の方が 137 名（正会員 70 名、院生会員・学生会員 57 名、非会員 10 名）、当日参加の方が 65 名（正会員 44 名、院生会員・学生会員 6 名、非会員 15 名）、招待者が 10 名、総計 212 名でした。研究発表は、ポスター形式で 84 件（取り消し 3 件を含む）あり、そのうちの 45 件は院生会員・学生会員が責任発表者でした。若手研究者による発表が多かったのが特徴かと振り返っています。

当学会は、1992 年 6 月に日本性格心理学会としてスタートし、2003 年 10 月の名称変更を経て今日にいたっています。その 15 年を振り返るとともに、今後のパーソナリティ研究のあり方を考えることを目的に、歴代の理事長にお集まりいただきミニ講演をしていただくという会を企画させていただきました。ただ、名称変更にご尽力いただいた第 3 代松山義則理事長がご都合によりご欠席されたのは非常に残念でした。第 1 代詫摩武俊理事長、第 2 代大村政男理事長、第 4 代杉山憲司理事長がそれぞれの立場から、ご自身のお考えやご研究内容を紹介したり、当時を振り返りながらエピソードをご披露いただくなど、当時を知る人にとっては懐かしく、知らない人にとっても興味深く聞くことができたのではないかと思っています。また、名誉会員である星野命先生には無理にお願いして、学会の名称変更かかわる裏話をご披露していただきました。そのほか、各先生にゆかりの方々に一言ずつお言葉をいただき、会を閉じさせていただきました。

懇親会にも多くの方にご参加していただきました。会員相互の交流がいたるところで行われ和やかに進められました。その懇親会では、新たに名誉会員になられた山岡淳先生がご紹介され、ユーモアあふれるご挨拶をされ、喝采され祝福されました。また、昨年岩手大学で開催された第 14 回大会（堀毛一也委員長）において実施された「優秀大会発表賞」の表彰も行われました。懇親会に招待された 4 名の受賞者（代理を含む）の方に賞状が渡されました。このような賞が設けられたことによって、研究発表の質および量が充実していくことが期待されます。

今大会は、今後どの大学でもお引き受けいただけるように、質は落とさぬようにそしてコンパクトな大会にすることを心がけました。その

ために、ご参加いただいた皆様には、行き届かぬところがありご迷惑をおかけしたりご不便をおかけしたりした点があったことをお詫びいたします。

来年の第 16 回大会は、北海道の帯広畜産大学（渡邊芳之大会準備委員長）において 2007 年 8 月 25 日（土）・26 日（日）に開催されます。来年北海道でお会いできることを楽しみにしております。

日本パーソナリティ心理学会第 15 回大会
発表取り消しのポスター発表（3 件）

P-1314 女子学生の心理社会的発達課題と風景構成法
青森明の星短期大学　鷲岳　覚

P-2312 制御焦点と自己呈示との関連について(2)
岩手大学大学院人文社会科学研究科
○新田　静枝
岩手大学人文社会科学部　堀毛　一也

P-2314 ハンスアスペルガー再考－アスペルガーが最初に報告した記念碑的四症例と自験例－
京都大学大学院医学研究科脳病態生理学講座
清水　光明

◆日本パーソナリティ心理学会企画の新刊案内◆

『事例に学ぶ心理学者のための研究倫理』 安藤寿康・安藤典明 編

A 5判・256 ページ／定価：本体 2600 円＋税／ナカニシヤ出版

「研究倫理」というと、大上段に構えてその原理原則を真正面から大まじめに論ずるか、手続きのマニュアルを示すか、それを茶化して斜めから相対化するか、そのいずれかに立たないと形にならないような気がする。だが本書はそのいずれにも立たず、問題そのものを豊かに提示する形を取った。もちろん原理的考察もなされているが、核になるのは、院生から重鎮まで、文字通り老若男女、さまざまな専門領域の総勢 31 名の執筆者が寄せる多様な葛藤の事例とその検討のプロセスである。人の心を相手に研究しつづけると、いつしか人の心の動きに逆に鈍感になってしまうという罠に陥る。本書が倫理対策のマニュアル本としてではなく、心を扱う専門家の心のセンサーを鋭くするための促進剤として読まれることを編集者の一人として希望している。（安藤寿康）

◆執筆者（五十音順、＊は編集委員）
青柳肇*／秋田喜代美／安藤寿康*／安藤典明*／伊藤義徳／上村佳世子／大河原美以／岡本依子／尾見康博／鹿毛雅治／神谷信行／川野健治／木島伸彦*／北原靖子／黒沢香*／古澤頼雄／小堀修*／近藤清美／坂上貴之／サトウタツヤ／菅原ますみ／杉森伸吉*／杉山憲司／瀧本孝雄／丹野義彦／都筑学／長谷川寿一／藤永保／松岡陽子*／南保輔／村井潤一郎

ミニ特集　ITの利用とパーソナリティ研究＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

今回の「ミニ特集」は、「ＩＴの利用とパーソナリティ研究」と題して、インターネットや携帯電話といったＩＴの利用とパーソナリティに関するご研究から学会におけるＩＴ利用についてのご提言まで、幅広くつづっていただきました。

インターネット利用とパーソナリティ

西村洋一（青山学院大学文学部）

インターネットについての心理学的研究の中には、インターネット利用とパーソナリティの関連について検討したものもかなりある。それらの研究にある焦点の一つは、あるパーソナリティ特性を持っている人が、インターネットというメディア（「インターネット」という括りは大まかではあるが、ここではまとめておく）の持つ特性により、現実の世界（オフライン）とは異なる行動やより促進する効果が見られるのではないかという点であると思われる。例えば、オフラインの世界において人間関係の形成に困難を抱えるようなパーソナリティ特性を持つ人にとって、インターネットのメディア特性が有利に働くという理論的な観点や研究結果がある。これらはインターネットが、利用者個人に対して有益となる場を提供するという可能性を示しているだろう。

ただし、そのような困難を抱える人が、インターネットにおいて積極的に人間関係の形成を行っているという研究結果が常に得られているわけではない。インターネットの利用行動がある１つのパーソナリティ特性のみによって全く異なるというのは、いささか大雑把な印象を受ける。インターネットの利用とパーソナリティの関連について考える際には、使用しているメディアの特性とパーソナリティ特性との絡みだけでなく、利用者のメディアの利用動機やコミュニケーションのありよう、そしてそこで形成されているコミュニティの性質などを総合的に捉える必要があるのではないだろうか。

インターネット利用とパーソナリティの関係については、インターネットの利用により得られた経験が、利用者のパーソナリティそのものに対して影響を与えるのか否かという研究の視点もある。インターネットの発展により、人間関係の形成や情報検索などを含めこれまで経験できなかったことができるようになった。それらの経験がパーソナリティにどのような影響を与えるのかという観点は、パーソナリティの理解にとっても、非常に興味深い。ただし、利用の内容については、より具体的な行動のレベルで、パーソナリティの変容との関係について検討がなされると、より応用の可能性が増すと思われる。

インターネットは誕生以来、特にここ 10 年の間に劇的な変化を遂げてきた。実際インターネットの１つの機能である Web は最近話題の「Web 2.0」という言葉に示されているように、バージョンアップしつつあるようである。インターネットを研究のテーマとすることは、技術の革新に対して多くの場合後追いになってしまう側面があるのも否めないだろう。しかし、上記のようにインターネット利用とパーソナリティの関係についてより具体的なレベルで研究成果を積み重ねることで、インターネットという技術の発展に対して心理学の観点から積極的に提言す

ることもできるかもしれない。そのような期待を持ちながら、日々発展を遂げるインターネットについての研究を行うことは楽しい。

「携帯電話研究」あれこれ

高比良美詠子（メディア教育開発センター）

情報化の進展に伴い、携帯電話を使う機会は急速に増加してきています。総務省が行った平成 17 年の通信利用動向調査報告書によると、日本の６歳以上人口の 71.9%が携帯電話を利用していると答えています。また、携帯電話の場合、直接的に話すのではなく、インターネットに接続して情報をやりとりすることも可能ですが、このような携帯電話によるインターネットの利用率は、全体では 57%、世代別に見ると、20～30 代の利用率が 80%を超えています。また、ティーンエイジャーや 40 代の利用率もそれに迫る勢いです。

これほど携帯電話が日常生活の中に浸透してくると、「携帯電話の使用は、人の心理状態や人間関係にどのような影響を与えるのか？」という疑問が当然湧いてくるでしょう。そのため、この種の問題を検討した研究が近年増加しているようです。私も、安藤玲子先生や坂元章先生と一緒に、携帯電話によるインターネット使用がティーンエイジャーの自己開示、孤独感、対人信頼感、ソーシャルサポートなどに与える影響について検討を行っています。そして、パソコンによるインターネット使用と、携帯電話によるインターネット使用とでは、上記で挙げた各変数に対して異なる効果がみられるという結果を得ています。

なお、携帯電話研究は、上記とはまったく異なる角度からも行うことができます。例えば、「携帯メールアドレス」に着目した研究です。携帯電話によるインターネット使用の代表的なものに、携帯メールでのやりとりが挙げられますが、このやりとりに欠かせないのが、携帯メールアドレスです。そして、大学生に携帯メールアドレスを見せてもらうと、その内容の多様さと独自性に驚かされることがあります。そこで、大学生を対象に、自分の携帯メールアドレスに含めている要素（例えば、名前、誕生日、好きなもの）と、そのような要素を含めた理由について尋ねる調査を、森津太子先生と一緒に行いました。これにより、携帯メールアドレスをつけるときに、人が考えていることを明らかにしようとしたわけです。また、この調査の中で、６割以上の人が、「自分の携帯メールアドレスには、自分自身の性格や特徴などが反映されている」と回答していました。そこで、第三者に携帯メールアドレスのみを見せて、持ち主の性格を推測してもらうという実験を行い、この推測がどの程度当たっているかという問題についても検討を行いました。

この他にも、「携帯電話を利用したウェブ調査」に関する研究を、森津太子先生や稲葉哲郎先生と一緒に行っています。携帯電話は、個人が常時携帯しているメディアなので、携帯電話のウェブ機能をうまく利用すれば、より自由な形で調査を実施することが可能になります。そこで、この新しい調査形態の妥当性と、今後の利用可能性について検討を行っています。

このように、一口に携帯電話研究といっても、さまざまな角度から検討を行うことが可能です。携帯電話の使用が人に及ぼす影響をより豊かな形で理解していくためには、固定観念にとらわれず、多様な切り口から研究を行っていくことが必要ではないかと思っています。

学会におけるＩＴの利用についての提言
～学会員が参加可能なシステムの構築に向けて～

若尾良徳（和洋女子大学人文学部）・天野陽一（東京都立大学人文科学研究科）

心理学系の学会もIT化が進み、数年前と比べると利便性が劇的に高まっている。とはいえ、現状ではまだインターネットの特徴である情報の即時性・双方向性・検索容易性といった利点を生かしきれていないように思える。ここでは、さらに利便性を高め、学会員の研究活動や相互交流を活性化させるための提案をさせていただきたい。

現在の日本パーソナリティ心理学会Webサイト（以下、学会webサイト）が抱える問題点のひとつとして、情報伝達が一方向的であり、更新頻度も少ないという点が挙げられる。これまでのところ、学会Webサイトを通して提供される情報はその大部分が学会主体のものに限られていた。また、2006年にはいってからの更新回数も8月半ばの時点で10回にとどまっている。学会員一人一人が情報を発信できるようにすれば、情報量も増え、情報交換も活発化するのではないだろうか。

具体的な方策としては、電子掲示板やWikiを取り入れ、学会員であれば誰でもが情報を発信できるようにすることが考えられる。大会時に会場に設置されている掲示板のようなものをWWW上で常時利用できるようにするのである。こういった場を通して、研究会や読書会の告知をすることは主催者・参加者の双方にとって有意義であると考えられる。研究会の情報は口コミで広まることが多いが、このようなシステムを通じて参加者を募集することでより活性化するであろう。さらに、学会Webサイト内に各研究会、読書会独自のページを作れるようにし、各会の責任で更新してもらう形をとれればなおよい。トップページに情報の更新状況がリアルタイムで表示される機能を設ければ、閲覧者が情報へアクセスしやすくなる。

もうひとつ学会Webサイトの問題点を挙げるならば、学会員の研究活動をサポートするようなシステムも不足している点であろう。たとえば、論文投稿者、審査者用の情報ページの改善ができないだろうか。現在、投稿者、審査者がそれぞれ参照できるページがあり、論文のダウンロードや締切日の確認ができるようになっている。これらの情報に加えて、論文審査の段階が随時更新され、投稿者とすべての審査者が参照できるようにしたらどうだろうか。自分の投稿した論文がどの程度まで審査が進んでいるのか（審査者のうち何人が査読し終わったのか）が一目瞭然であり、結果を待つ投稿者にとっては非常に有益であろう。さらに、審査者にとっては締切を守るプレッシャーとなり、昨今問題視されている審査の遅延も少なくなるのではないだろうか。

以上、二点の提案をさせていただいたが、このような大規模なシステムの構築・変更には非常に大きなコストがかかる点に注意を喚起しておきたい。現在、学会の運営の多くは、学会員有志の方によるボランティアでまかなわれている。システムを利用者する際には、そのことを忘れてはいけない。システムの保守・運営にあたられている有志の方に敬意を払うとともに、今後は特定の個人に負担がかからないようなシステムを考案することも必要であろう。

【研究余滴】

こころの「理解」と「therapy－治療」について

白砂佐和子（明星大学心理相談センター）

「心理の分析」という行為は、魅力と危険に満ちたものだと思う。

痛ましい事件のニュースが流れると、周囲から「あれはどういう心理なの？」「異常なの？」などと尋ねられて、戸惑うことがある。もちろん、私自身も、好奇心が刺激されている。どうして人は、このような特異な「心理」を理解したいと思うのか。一つは、自身の安全を保つ本能としての情報収集として理解することができる。そしてまた、「怖いものみたさ」とか「好奇心」といった本能も関係があると思う。われわれが小説や映画で「ドラマ」を求めるのも、同じような心理かもしれない。

ではただ純粋に、相手を理解したいと思うことはあるのだろうか。「君のことを知りたい」という告白があるように、相手に関心をもつことはポジティブなものとしてとらえられる。そしてまた、私が仕事をしている臨床の場でも、相手に「わかってもらえた」という体験が人の気持ちをやわらげることは事実だと思う。けれども「理解」が「治癒」に結びつくためには、たくさんの条件が付くように思う。

まず、どこまで分かってもらえるかということが問題である。たとえば、自傷行為をするクライエントがいる。「怒りの気持ちがある」という理解なら、クライエントは自分で気づいているだろう。しかし「セラピストに不満を言いたかったけれども、言えなかった」という理解になると、少し違ってくる。さらに「このように、相手との関係を大切に思うがゆえに、相手に直接に不満を言えずにためこむことが、これまでの人生のなかでパターンとなってきた」という理解になると、伝わるものがだいぶ多くなるだろう。

それから、何のために分かろうとしているか、ということも大事だと思う。例えば、不登校の子をもつ親が「なぜ行きたくないのかを知りたい」という。そこにもし、（不登校の原因を見つけて、その対策を知って、そして解決…）という親の気持ちがあるならば、子どもはこころを開かないだろう。そこには、「子どもの性格に原因がある（私には問題はない）」という親の思いが見え隠れしてしまう。

そしてまた、もし相手の何かを理解したとしても、なるべくなら、私は相手に伝えたい気持ちを制し、自分で「抱える」ことを試みる。その時のクライエントには抱えられないからこそ、意識していない内容なのだから。けれども、相手の気持ちを私も一緒に体験して（抱えて）いなければ、何も伝わらないし何も起こらない…こう考えてくると、相手を理解すること、気持ちを共に感じること、相手に「理解された」と感じること、などが込み入った関係性をもってくる。心理療法は一般に「助言をしないで話を聞く」といわれているが（そして実際は原則ばかりでもないが）、最近になって、その「原則」の意味が見えはじめてきたような気がする。つまり、「理解するとはどういうことか」という広大なテーマの中に迷い込んだところなのである。